

南九州で検出される弥生時代の大溝について

本 田 道 輝

1. はじめに

弥生時代を代表する遺構の一つとして、溝がある。九州では古く鏡山猛が注目し、比恵遺跡（福岡市）の調査事例を基礎資料として『環溝住居跡小論』をまとめた（鏡山 1956・1958・1959）。その後、板付遺跡（福岡市）の調査の中で再び大規模な溝が検出され、その中の弧状溝の掘削目的については「防湿のため、用水のため、防禦のためと、いろいろの推察がなされるが、集落址の存在したと考えられる地域を弧状にとりまいている形からして、防禦用とする考えが一番強い。」と判断している（森・岡崎 1961）。

1960年代後半以降全国各地で開発に伴う発掘調査が増加し、その件数も一遺跡の調査面積もそれまでとは比較にならない規模となり、当然弥生時代の溝の検出例も増加し、この遺構に関する議論、とりわけ集落を環状に囲む溝やその内部の集落をめぐる議論（環濠・環溝⁽¹⁾ 集落論）は活発化することとなった。さらに、吉野ヶ里遺跡（佐賀県神埼郡吉野ヶ里町・神崎市）の調査は、弥生時代の集落及び集落を取り囲む大規模溝のほぼ全容を明らかにし、その議論にますます拍車をかけることとなったのである。環濠（溝）集落に関しては、出現時期と系譜の問題、造営集団と造営目的の問題、変遷と変質の問題、掘削に関する技術的問題等々多岐にわたり議論は続いている。

一方南九州地域を見てみると、溝の検出例は徐々に増加しているものの、個別報告にとどまり、それ以上の議論があまり見られない状況が続いている。それは、多くの調査が溝の部分検出で、住居址等の他の遺構との関係性が判然としないことも理由の一つであろう。筆者は、鹿児島県域で検出された大

規模な溝について簡単にまとめたことがある（本田 2006）が、ここで再度南九州地域のこれまでの調査例をまとめ検討を加えてみようと思う。

ところで、筆者はこれまで先に述べたような他の遺構との関係性が判然としない例については、単純に溝あるいは大溝⁽²⁾と呼んできた。本稿でもその用語で記述したいと思う。

2. 南九州で検出される弥生時代の大溝について

ここでは、南九州で検出報告されている弥生時代の大溝について、鹿児島県・宮崎県南部・熊本県南部の地域ごとに、遺跡単位でその規模や内容を見ていこうと思う。ただし、宮崎県や熊本県に関しては目に触れていない報告例もある可能性を指摘しておきたい。このことに関しては、引き続き情報を収集したい。また、この地域では古墳時代に下る大溝の存在も知られている。大溝掘削の終焉時期を知るためにも、これらも取り上げたいと思う。

1. 鹿児島県域（第1図参照）

鹿児島県域で比較的大きな溝が検出報告されているのは、いまのところ薩摩半島と大隅半島である。しかし、状況から考えてそれ以外の地域の平野部にも良好な弥生時代の遺跡は存在するはずであり、そのうち大溝の報告もなされる可能性が高いことは指摘しておきたい。ただ南島に関しては、大隅諸島までが弥生文化圏と考えるが、大溝をもつほどの規模の遺跡が存在するかについて筆者はやや懐疑的である。

（1）入来遺跡（河口 1976・河口編 1976）

入来遺跡は日置市吹上町入来に所在し、伊作平野西側に舌状に突出したシラス台地東端に立地する（第1図2）。標高約20m。遺跡は採土工事によって発見され、1969年調査が開始された。トレンチ調査を状況に応じて拡張していく方法で、弥生時代の溝や貯蔵穴あるいは古墳時代の堅穴



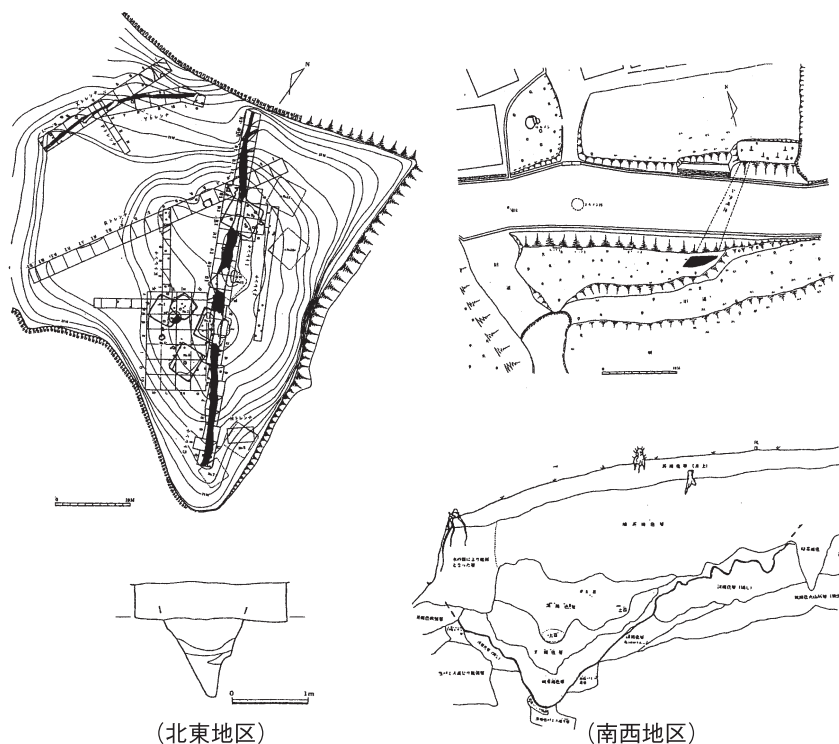
第1図 本稿で取り上げる遺跡の位置

住居等が検出されたが、残念ながら調査対象地は多くの未調査区域も残したまま、再度始まった採土工事によって破壊され消滅してしまった（入来遺跡北東地区）。

一方1975年には調査地から160m程南西方向の町道拡幅工事法面で、大規模な溝の断面が発見、調査された（入来遺跡南西地区）。筆者がいう大溝の鹿児島県域での最初の調査例である。

入来遺跡北東地区の弥生時代の遺構には、断面V字形とU字形の二条の溝と貯蔵穴がある（第2図左側参照）。

V字溝は北北東～南南西の方向に台地東端部を横断しており、両側の



第2図 入来遺跡検出の溝（平面図 1/1000、断面図 1/100）

崖端に達しているものと推定されている。検出面からの溝幅142cm～30cm、深さ115cm～20cm、下底部は6cm～21cmの平坦面をなし、溝幅の大きい中央部が最も深い。47.5mが調査され、場所によって溝幅拡幅の跡が認められるという。溝内から出土した土器はその後入来式土器と命名され、弥生時代中期初頭の標式資料として知られるようになった。溝内出土土器との関係から判断して、この溝は弥生時代前期末～中期初頭に掘削されたものと考えられる。なお、溝内からは他に豊後地域に特徴的な、脚に透穴をもつ台付鉢（高杯）片も出土している。透穴が楕円形で坪根編年の中期1（坪根 2006）に該当し、入来式時期に豊後地域と交流が

あったことが考えられる。また、包含層からは多条沈線をもつ瀬戸内地方の前期甕片、採集品には挟りをもつ石庖丁片などがみられることも付記しておきたい。

一方U字溝は、V字溝の西側に弧状を描いて存在し、約22mが調査された。検出面からの溝幅46cm～18cm、深さ20cm程と小規模である。時期はV字溝と同じと判断されている。河口は、土地の区画以外の機能は考えにくいとし、中期前半の集落がU字溝以西に存在する可能性を指摘している。

両者の溝に囲まれた区域からは同時期の貯蔵穴一基、その可能性がある土坑一基が検出された。貯蔵穴は円形でわずかに床面に向かって広がる形状をなしている。検出面で径160cm、深さ30cm、入来式土器のほか床面近くに木炭・獣骨・魚骨が相当量出土している。土坑は貯蔵穴より南2mを隔てて、長径90cm、短径75cmの略楕円形の二段掘りで、深さ27cm、遺物は極めて少ないが同じく入来式時期と判断された。二条の溝に囲まれて貯蔵穴以外の遺構が存在したかについては、先に述べたように調査途中で破壊されたため不明であり、検討できない。ただし、古墳時代の堅穴住居が複数検出されるなかで、弥生時代の堅穴住居がまったく検出されていないことを考えると、最初からこの区画には溝と同時期の堅穴住居はなかった可能性も高い。

入来遺跡の南西地区では、道路の両側崖面に断面V字形の溝が見られるところから、道路を北東から南西に横断する形で溝が存在したと思われる（第2図右側参照）。現地形はこれまでの道路工事等で大きく改変され、町道両側とも長さ3mほどが残存するに過ぎない。北側は墓地のため、南側の高地が可能な範囲で調査された。溝は道路断面ではV字形をなすが、調査地ではU字形に近く、検出面で幅300cm、深さ125cmの規模を示す。法面の断面は溝を斜めに切っているため溝の規模を正確には示さないが（第2図右下）、筆者は本来の規模は幅400～500cm、深さ250～300cm程にはなるものと判断している。溝内の上部堆積土からは弥生中期末

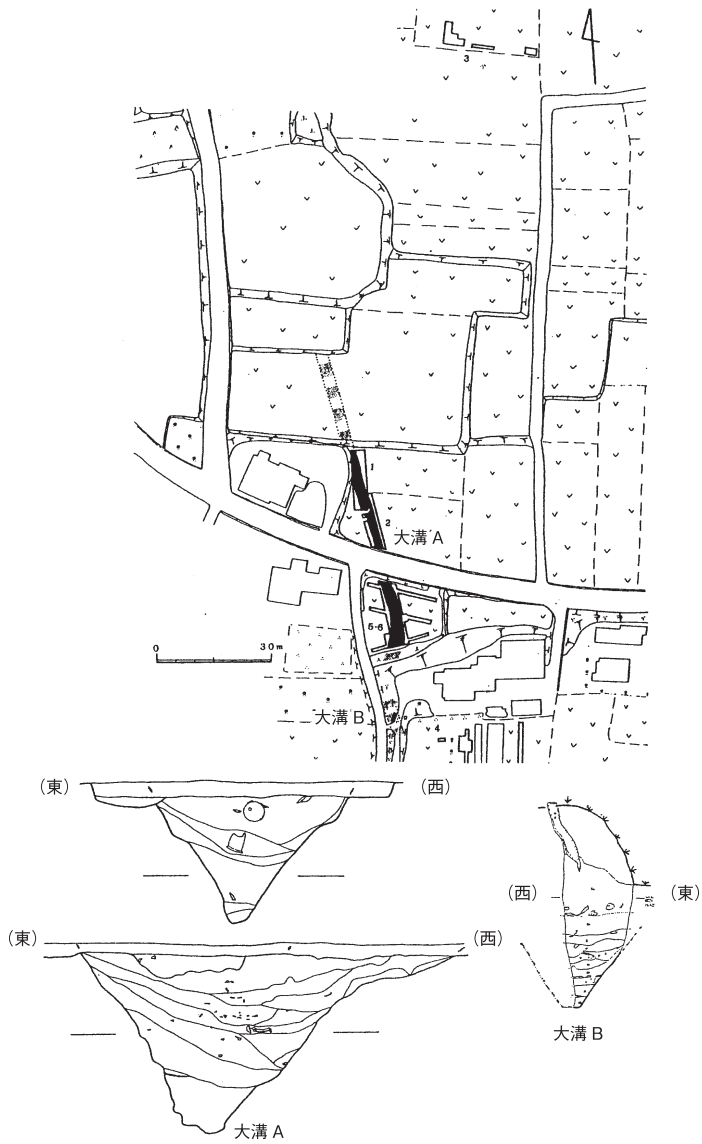
の土器片も見られたが、下部からは中期後半の土器片のみ出土(須玖Ⅱ式古段階該当か)したとのことであり、掘削時期はその時期かそれよりやや遡る時期と思われる。周辺地形が大きく改変されているため他の遺構は不明であるが、大溝の20m程西側にドルメンではないかといわれる大石があり、さらにその西側10m程の地点では一旦取り上げ再度同じ墓壇に埋めもどしたと思われる中期後半の甕棺片も検出されている。このようなことから、大溝の西側に墓域があった可能性も考えられている。

(2) 松木藺遺跡

松木藺遺跡は南さつま市金峰町尾下に所在し、金峰山の西麓から田布施平野中央部へ舌状に伸びるシラス台地の先端部近くに位置する(第1図3)。標高は21m前後、採土工事によって何度も破壊されたが、1978年筆者が中心となって調査を開始、これまでに6次の調査を実施している。調査によって、弥生時代の断面V字形の大溝、竪穴住居、古墳時代の竪穴住居、古代の柱穴や竪穴等を検出している(第3図参照)。

大溝は、これまでに80mを確認、38mを調査した。検出面で幅200～400cm、深さ150cm～250cmを測り、下底部は幅20cm程の平坦面をもつ。旧地形削平後のシラス面検出なので、本来の規模は少なく見積もっても幅400～500cm、深さ250～300cmはあったと考えられる。第4次調査で一段下がった宅地の隅を調査した際にも大溝の一部を検出した。この大溝も南北方向に走ることが想定され、前者の大溝(大溝Aと仮称)と同規模の大溝(大溝Bと仮称)が東西に10mほどの間隔をおいて、南北幅の狭い尾下台地を断ち切る二重の条溝の可能性を考えたこともある。ただし、大溝Aはその後の調査で西側へカーブしていくことが判明し、大溝Aと大溝Bの関係や大溝の方向については再考する必要がでてきている。

大溝Aの溝内埋土はある時期までは東側から流入した状況を示し、さらに断面図に見る下から三番目の埋土には、大溝掘削の際の排土と思われる種々の色調のブロック土が認められた。このことは、大溝Aの東側



第3図 松木菌遺跡検出の溝 (平面図 1/2000、断面図 1/100)

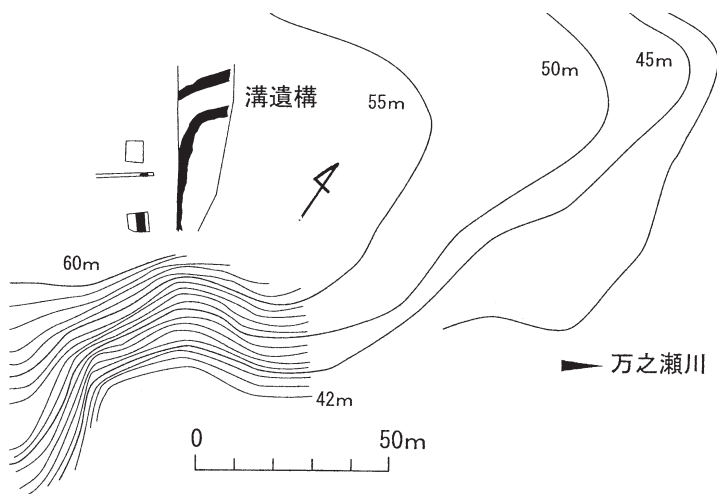
で流れ込むほどの近さに排土がまとまって置かれていたことを示し、土塁が存在した可能性も指摘できよう。また、遺物は、大溝が100cm程埋まった時点で東側から大量に廃棄された状況を示し、この大溝と関連する集落も大溝の東側にあった可能性が高いと考える（本来の台地面は、大溝の東側を一度しか調査していないが、狭いトレンチ調査で3軒の弥生時代の竪穴住居が部分的に検出され、弥生時代中期末の土器が出土した）。

溝内から出土した土器は、それまで鹿児島県で不明瞭であった弥生時代後期初頭から前半の特徴を示すものが多く、松木蘭式土器と呼ばれその時期の標式資料となっている。大溝の掘削時期はそれら出土土器の特徴から、弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。また、それらの土器に混じって、中北部九州地方・大隅半島地域・瀬戸内地方の特徴を示す土器が出土するのもこの遺跡の特徴である。

（3）寺山遺跡（川辺町教委 2004・寺山遺跡民間調査会 2006）

寺山遺跡は南九州市川辺町永田に所在する（第1図4）。遺跡は大谷川と万之瀬川に挟まれて南北に走るシラス台地の北端部近くに位置し、標高は60～65m、東側に広がる平野部との比高差は約20mを測る。大型商業施設建設に伴い2001年から発掘調査が実施され、2003年鹿児島県で初めて並行して環状にめぐる二重の大溝が発見された（第4図参照）。それまで大溝は海岸部でのみ検出されていたため、内陸部にも存在することが明らかになった意義は大きい。残念ながら大溝以外の弥生時代の遺構は包含層の残存状態が悪いこともあり、大溝から200m程西側に竪穴状遺構と土坑が検出されたに過ぎない。

環状の大溝の内、外側の大溝は幅250cm、深さは220cmで長さ7m程調査され、内側の大溝は幅300cm、深さ220cmの規模で長さ30m程調査されている。ともに断面はV字形であり、東側はそのまま崖に達している可能性が高い。上部が削平されていることから、本来の大溝の規模は幅、深さとも300cm以上あったことが推測される。溝内から出土した土器は弥生



第4図 寺山遺跡検出の溝（平面図 1/2000、断面図 1/100）

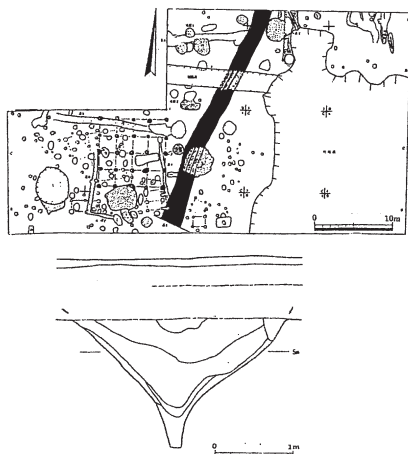
時代中期前半から後半のもので、両大溝の掘削時期は、弥生時代中期前半と判断して良いであろう。この遺跡でも、中北部九州地方の同時期の特徴を持つ土器が混在しており注目される。遺物の出土量は内側の大溝に偏っている。先に述べたように、残念ながら周辺の調査区域では同時期の遺構は検出されておらず、また大溝の北東側も未調査のため溝と集落等との関係は明らかではない。大溝の走る方向からすれば、台地先端部の北東側を囲むことになり、囲まれた範囲はさほど広いものではない。二重環状大溝で囲まれない外側に当時の遺跡の主体部をもとめる意見もあるが、大溝の遺物の出土状況は、廃棄主体者が大溝により囲まれた内

部に存在したことを示唆しており、筆者は大溝内部に当時の遺跡の主体部があるものと判断している。このことについては今後の資料の増加に待ちたいと思う。

(4) 北麓遺跡（鹿児島市教委 1996）

北麓遺跡は鹿児島市南部の上福元町北麓に所在し、永田川と木之下川に挟まれた沖積地の微高地に位置する（第1図6）。標高は6mである。マンション建設に伴って1995年調査が実施された。弥生時代の南北に走る大溝、中世の掘立柱建物跡や土坑が検出された（第5図参照）。残念ながら街中のため攪乱された箇所も多く、弥生時代の遺構は大溝のみで、住居址等の遺構との関係は不明である。大溝は、長さ28mにわたって調査され、さらに南北の調査地外へ延びている。検出面で幅200～270cm、深さ160cm、断面V字形で下底部はこれまで紹介したV字形大溝同様左右の足を前後に置きながら歩ける程度の平坦面をもつ。北から南にわずかに傾斜し、調査者は排水目的の溝の可能性を考えている。本来の大溝の規模は、土層の堆積状況から幅350cm、深さ180cm以上と推測された。

遺物は、大溝が70cm程埋まった時点で廃棄され、比較的大溝の西側に偏っているため大溝西側に集落が存在する可能性が考えられている。大量に出土した土器は、微量弥生時代後期に下るものがあるものの、大半は弥生時代中期初頭から前半の特徴を示し、溝の掘削



第5図 北麓遺跡検出の溝
(平面図 1/1000、断面図 1/100)

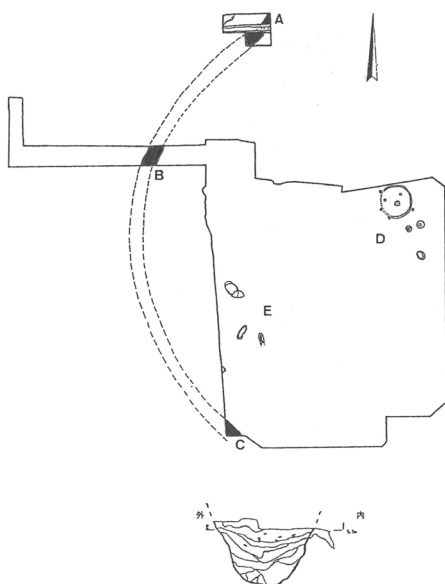
時期は中期初頭頃と判断してよいであろう。甕や壺に絡縄突帯をもつものが多いのは地域の特徴かもしれない。また、ここでも中北部九州地方の特徴を持つ土器が散見され、筆者等のいうボテ口縁甕⁽³⁾の存在にも注目しておきたい。

(5) 鹿児島大学構内遺跡

(新里2003・鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2004)

鹿児島大学構内遺跡郡元団地地区（鹿児島市郡元）は、甲突川や新川によって形成された沖積平野南端近くの微高地に位置し、標高7mを測る（第1図7）。この付近は、古墳時代の集落としてよく知られており、これまでも多くの地点で施設の改修や新築に伴い鹿児島大学埋蔵文化財調査室による発掘調査が実施されている。

2002年には鹿児島大学理学部改修地の調査が実施され、古墳時代後半期の竅穴住居が多数検出されたが、その下位で部分的ではあるが環状に走ると思われる断面U字形の溝が検出された（第6図参照）。上部を古墳時代の住居に切られており、検出面で幅約120cm、深さ約100cm、溝内には弥生時代前期末～中期初頭の土器がまとまって包含されていた。溝の掘削は弥生時代前期末頃と思われる、目下のところ鹿児島県で最も古い溝遺構として良いであろう。正式報告がまだ



第6図 鹿児島大学構内遺跡検出の溝 (平面図 1/1000、断面図 1/100)

だのため詳細は明らかでないが、同時期の他の遺構はなさそうで、集落等と溝の関係は不明である。

(6) 王子遺跡（鹿児島県教委 1985）

王子遺跡は鹿屋市王子町に所在し、肝属川と串良川に囲まれた広大なシラス台地、笠野原台地の南西縁辺部に位置する（第1図8）。この笠野原台地は乏水地域として知られ、近世に深井戸を掘る技術が確立するまでは開発のおよばない地であったという。王子遺跡付近でも西側平野部とは約40mの急崖となっており、弥生時代遺跡としては特異な立地となっている。1981年～1983年国道鹿屋バイパス建設に伴って発掘され、鹿児島県で初めて弥生時代の集落が出現し話題になったが、残念ながら保存運動の甲斐なく道路予定地は調査後破壊された。

集落の西端を西側崖へむけて走る断面U字形の溝（検出面での幅140cm、深さ47cm）と、集落中央を南北に走る断面不定形の溝（二種の溝が重複しており、溝Ⅰは検出面で最大幅145cm、最大深さ43cm、溝Ⅱは最大幅280cm、最大深さ38cm）が検出された。溝埋土中の土器は小片であるが、埋土の色調などから弥生時代中期末頃の溝と考えられている。西側崖に向けて走る溝は排水溝の可能性があり、中央溝のうち特に溝Ⅰは踏みしめられたような硬化面があるとのことであり道として使用されていたことも考えられる。溝の幅はそれなりの広さがあるものの、深さは浅く、筆者がここで注目している溝遺構とは性格が異なりそうである。

(7) 西ノ丸遺跡

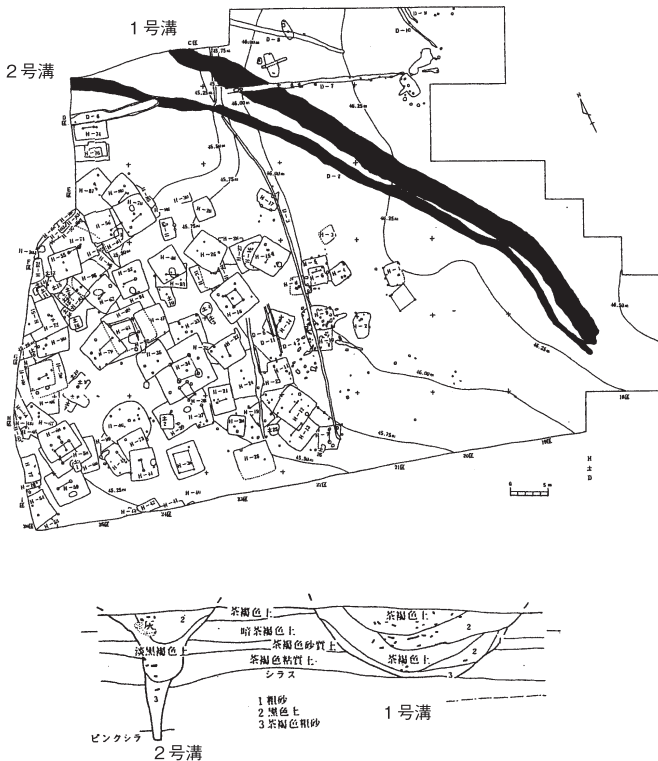
まだ未報告であるが、筆者が言うところの大溝の大隅地方における初めての発見例であるので、少々触れておきたい。

遺跡は鹿屋市串良町に所在し、肝属川と串良川の合流地点に近い肝属平野中心部の一角に位置する（第1図10）。標高は4mと低い。圍場整備に伴って深く掘削される部分が調査され、断面V字形の大溝が確認された。

大溝は環状にめぐる可能性も指摘されており、周囲からは弥生時代～古墳時代の竪穴住居が多数検出されたという。大溝は、幅約250cm～350cm、深さ約150cm～250cmの規模であり、埋土中からは弥生時代中期後半～末時期の遺物が出土している。推測できる大溝の規模や掘削年代は、報告書が刊行されてから検討したい。

(8) 辻堂原遺跡（吹上町教委 1977）

辻堂原遺跡は日置市吹上町中原に所在し、小野川と伊作川に挟まれたシラス台地西端部近くに位置する（第1図1）。標高は35m程。1976年中学



第7図 辻堂原遺跡検出の溝（平面図 1/1000、断面図 1/100）

校建設に伴って発掘調査がおこなわれた。調査地内では、104基の竪穴住居が複雑に切り合って存在し、その東側に住居群を囲むように弧状の大溝と溝が検出されている（第7図参照）。その一端は調査地外へと伸び、南側は二条の溝とも調査地内の同じ場所で終わっているの、ここに入り口としての陸橋があったと考えて良いであろう。その外側には竪穴住居は存在しない。

住居群に近い方の溝（2号溝）は断面V字形で、検出面で幅100cm、最大深さ170cm、溝の埋土中には古墳時代初頭から前半の土器が包含される。2号溝と並行して走るもう一つの溝（1号溝）は断面U字形で、検出面で最大幅280cm、深さ100cmを測る。1号溝はやや規模は小さいが大溝として良いであろう。溝の埋土中には古墳時代前半の土器が包含される。掘削時期は、やや2号溝の方が古いかもしれないが、ほぼ同じ時間帯の中で機能していたものと思われる。規模は小さいながらも環濠（溝）集落として良いであろう。

（9）^{こてし} 答石遺跡

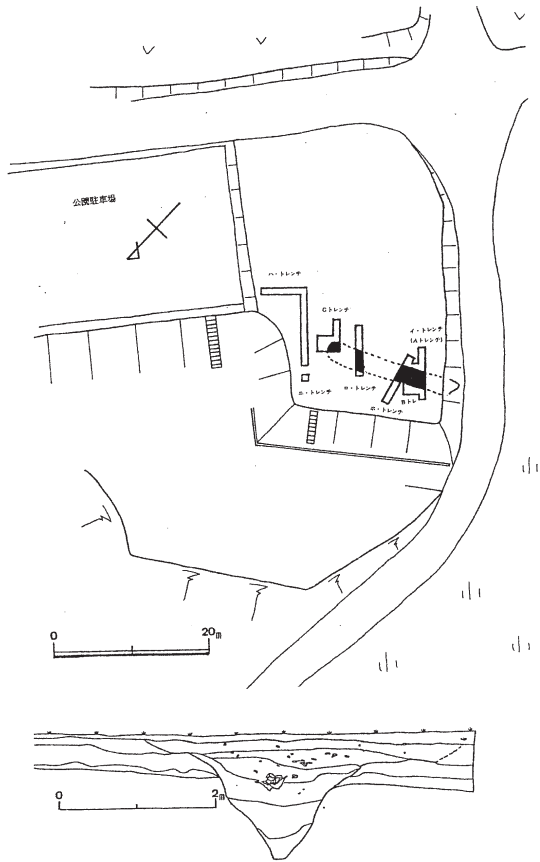
答石遺跡は南九州市川辺町中山田に所在し、北流する大谷川と並行してその左岸側に広がるシラス台地の北端部近くに位置する（第1図5）。標高は106m程。塘之池公園整備工事に伴い大溝断面が露出し、筆者が中心となって2005・2006年調査した。調査地はすでにアカホヤ層まで削平され、大溝以外の遺構は検出できない。大溝は東西方向に走り20m程を確認したが、調査地の中で一旦終わっている。おそらくこの東側に入り口としての陸橋があったのであろう。大溝は断面V字形で、検出面で幅250cm、深さ150cm、下底部は幅15cm程の平坦面をもつ。本来の規模は幅350cm、深さ200cm以上はあったであろう（第8図参照）。大溝が70cm程埋まった時点で古墳時代前半時期の土器の大量廃棄（一部単なる廃棄とは思えない重なり方をした出土状況も認められる）が見られ、掘削時期も古墳時代初頭～前半頃と思われる。土器は東側から溝の傾斜面にそっ

て流れ込んだ状況を示し、大溝の東側に集落の存在が予想される。調査地東側の本来の台地面(畑地)には多量の土器片が認められ、かつて道路工事によってできた法面に竪穴住居の断面が見られた⁽⁴⁾ことも、溝内の遺物出土状況からの推測とよく一致する。

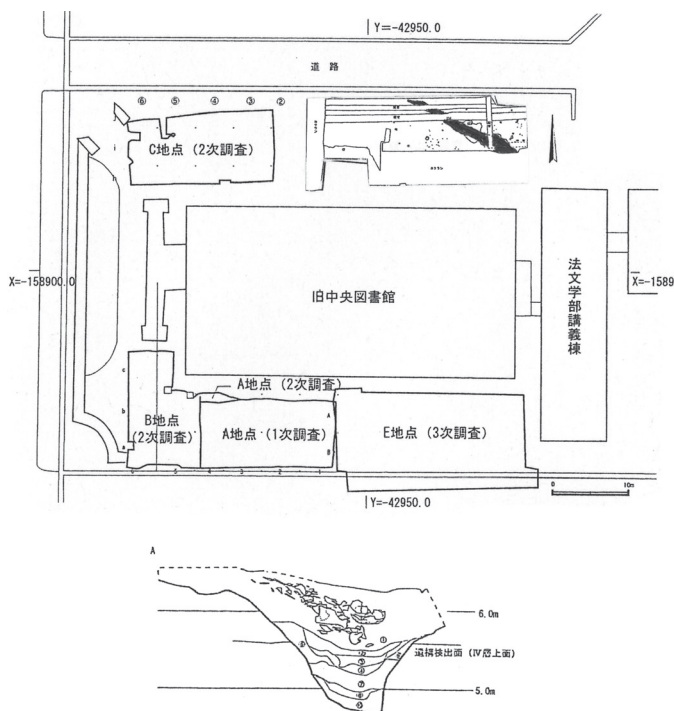
(10) 鹿児島大学構内遺跡(鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2005)

鹿児島大学構内遺跡についてはすでに記述したが、中央図書館建て替えに伴

い、1992～1994年3回に分けて発掘調査が実施された。このうち、1994年の調査で大溝が検出され15.6m程調査されている(第9図参照)。この大溝は北西から南東方向に走り、攪乱によって上部を削平されているが、断面はやや崩れたV字形をなし検出面で幅200cm以上、深さ120cmを測る。本来の規模は幅300cm以上、深さも200cm程はあったであろう。80cm程埋まった時点で、遺物の大量廃棄が見られ、これまでの調査で多数の住居



第8図 答石遺跡検出の溝
(平面図 1/1000、断面図 1/100)



第9図 鹿児島大学構内遺跡検出の溝（平面図 1/1000、断面図 1/100）

が検出されている大溝北側から流れ込んだ状況を示している。大溝埋土中から出土する土器は古墳時代後半のものであり、大溝の掘削時期は同時期かそれよりやや遡る時期と考えられる。

(つづく)

註

- (1) 九州では吉野ヶ里遺跡に代表されるように、大規模な溝遺構で集落が囲まれる場合環濠集落の名称が使われることが多い。一方、「濠には、城のまわりにめぐらしたほりの意もあり防衛の意を最初から前提とする感が強い」ため、溝の字を使用する」とする意見もある（武末 1990）。
- (2) 感覚的ではあるが、簡単には飛び越えられない幅と簡単には上れない深さで傾斜をもつ大規模な溝を大溝と呼んでいる。

- (3) すでに述べたことがあるが(本田 1996)、筆者等(中村直子、西谷彰、筆者)が日常的な会話の中で使用していたもので、学術用語ではない。おそらく伊佐盆地などの内陸山間部に広がる地域色の強い中期甕と考えた。その後、東憲章が「山の弥生土器」として取り上げたものも同類であり(東 1998)、それによってこの種の土器が霧島山麓を中心に宮崎、鹿児島両県に分布することを知った。
- (4) 東和幸教示

引用・参考文献

- 鏡山 猛 1956 「環溝住居趾小論」『史淵』第67・68合輯、第71輯 九大史学会
 1958 「環溝住居趾小論」『史淵』第74輯 九大史学会
 1959 「環溝住居趾小論」『史淵』第78輯 九大史学会
- 鹿児島県教育委員会 1985 『王子遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)
- 鹿児島市教育委員会 1996 『北麓遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(21)
- 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2004 『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報18』
 2005 『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報19』
- 河口貞徳 1976 「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 鹿児島県考古学会
- 河口貞徳編 1976 「入来遺跡調査概要 - 支石墓研究の一環として - 」『鹿児島考古』第11号 鹿児島県考古学会
- 川辺町教育委員会 2004 『寺山遺跡』川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
- 新里貴之 2003 「鹿児島大学構内遺跡 I・J - 7・8区(理学部改修地)の調査」第49回鹿児島学会大会発表資料
- 武末純一 1990 「北部九州の環溝集落」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会
- 坪根伸一 2006 「東部九州における弥生時代中期土器の諸相 - 大分平野部(別府湾沿岸地域)を中心とする中期土器の様相 - 」Archaeology From the South 鹿児島大学考古学研究室25周年記念論文集 鹿児島大学考古学研究室25周年記念論文集刊行会
- 寺山遺跡民間調査会 2006 『寺山遺跡』
- 東 憲章 1998 「山の弥生土器」宮崎考古学会第36回例会発表資料
- 吹上町教育委員会 1977 『辻堂原遺跡』
- 本田道輝 1996 「入来遺跡(日置郡吹上町)採集の弥生土器とその位置づけ」『大河』大河同人

2006 「鹿児島県域における弥生時代の大溝について」『寺山遺跡』寺山遺跡民間調査会

森 貞次郎・岡崎 敬 1961 「1 福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』本文編 日本考古学協会編 東京堂出版

挿図出典

第2図 河口貞徳 1976 「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 鹿児島県考古学会
(一部改変)

第4図 川辺町教育委員会 2004 『寺山遺跡』川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
寺山遺跡民間調査会 2006 『寺山遺跡』
(一部改変)

第5図 鹿児島市教育委員会 1996 『北麓遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(21)
(一部改変)

第6図 新里貴之 2003 「鹿児島大学構内遺跡Ⅰ・Ⅱ-7・8区(理学部改修地)の調査」
第49回鹿大史学会大会発表資料
(一部改変)

第7図 吹上町教育委員会 1977 『辻堂原遺跡』
(一部改変)

第8図 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2005 『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報19』
(一部改変)